

編集後記

提案「平賀陽之、症例報告の効果的な書き方（臨床神経2023;63:305-313）」を拝読しました。内容は非常に納得できるもので、大変参考になりました。特に共感した点は、症例報告の執筆を「臨床医としての訓練と医学教育の重要な教育機会」と捉えていることです。私たちは学会発表までで終わるケースと、症例報告まで書き上げるケースでは、若手医師の学びに雲泥の差があることを認識すべきだと思います。私自身の経験からも、症例報告を適切に書けるようになった若手医師は、科学的思考が磨かれ、その後の研究においても立派な論文が書けることが多いように思います。指導医は、症例報告の一連の過程を経験させることを目的に、若手医師を激励しつつ、完成までサポートする必要があります。

また、この「提案」において特に大切だと思った主張は、「症例報告は稀さのみを重視すべきではなく、『学ぶ点』が必要で、それが明確なメッセージとして示されている点が重要である」と述べておられることです。希少性だけで症例報告を執筆するのではなく、「自分たちはこの症例からこのような重要なことを学んだから、それを多くの脳神経内科の仲間に伝え、共有したい」という考え方が身につけ

ば、自身の臨床医としての成長に役立つし、指導医になってからもそのような考えを若手医師に伝えることができると思います。

もう1点、この「提案」において重要だと思ったのは、若手医師が初稿を書き上げるために知っておくべき Tips として、「抄録や序論から執筆すると挫折しやすいので症例記述からの執筆をお勧めしている点」です。私も大学院生に研究論文を執筆させる際に、Method → Results → Discussion → Introduction → Abstract → Title の順番に執筆することを指導してきましたが、症例報告でも同様のアプローチが有効であることを今後、強調したいと思いました。

上記以外にも、この「提案」から学ぶことは非常に多く、症例報告に挑戦しようとする若手医師だけでなく、スキルアップを目指す医師や指導医にもぜひ読んでいただきたいと思います。そして、若い医師と指導医が力を合わせて素晴らしい症例報告を「臨床神経学」に投稿し、「学ぶ点を見つける楽しさと、自分の論文が世に出る喜び」を実感していただきたいと思います。

(下畑 享良)

〈編集委員〉

編集委員長	小野寺 理	編集副委員長	三澤 園子		
編集幹事	石浦 浩之	漆谷 真	杉江 和馬		
編集委員	今井 富裕	木下 真幸子	古賀 政利	櫻井 圭太	柴田 護
下畑 享良	鈴木 匡子	辻野 彰	坪井 義夫	中嶋 秀人	新野 正明

「臨床神経学」	第63巻 第11号	2023年11月1日発行	
編集者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発行者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		西山 和利
印刷所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>